北八ヶ岳・稲子岳南壁左方カンテ

--- 森と湖に抱かれた岩壁 ---

（２０１０年5月の記録）

秋田 誠

日　程：２０１０年5月３０日 晴
参加者：安斎恭一、秋田 誠
タイム：唐沢鉱泉７：００ --- 中山峠８：５０～８：５５ --- 南壁左方カンテ取付き９：２５～９：４５ --- 終了点１１：４５ --- 稜線１２：１０～１２：５０ --- 唐沢鉱泉１５：００

順番待ちや騒がしいコールなし。後続パーティーへの気遣い不要。自分のペースで楽しく攀れる静かな岩場。次はどんなピッチだろう？ 不安と期待で胸がドキドキ。そんな岩をやりたくなって稲子の南壁を訪ねた。この壁のことは学生時代に、独標登高会 山口耀久（あきひさ）氏の名著「北八ツ彷徨」を読んで知った。いつか攀ろうとずーっと思っていた私のとって置きの壁なのだ。南壁、な・ん・ぺ・き。エベレストやローツェのジャイアント・フェースを始め、ミディなど外国ではワリと耳にするけど？ 北壁や東壁やらが幅をきかせている日本では、新鮮で素敵な、そそられるひびきでしょ？

唐沢鉱泉から 2 時間強。岩場へのアプローチとしては例外的に楽チンな登りだ。渋ノ湯からの道を合わせると残雪の登りになった。北八ツと云えども標高２，０００㍍を超すと春はまだ先。誰もいない黒百合ヒュッテでは寒暖計が３℃を示していた。中山峠からの下りの急なこと。クサリ場があるとは思わなかったよ。カチカチの雪道を急降下。北八ツと侮った性根にがつんとパンチ一発だ。カシミールで拡大した地図を確かめながら２００㍍ほど下る。南壁の匂いが濃厚になった。それじゃぁっと、シラビソ林に突っ込み大岩の堆積する沢を急登。あった、あった、林の中に鮮やかな踏跡を発見。

白状しよう。稲子南壁は２度目なのだ。昨年の秋、妻と麦草峠を越えて東面のしらびそ小屋をベースに南壁にタッチしたのだ。しかし、目指す左方カンテの取り付きが皆目分からず、壁の下をウロウロしただけで敗退。何故だか、妻と込み入った山に行くとロクなことがない。結局このときも、妻は私の山のセンスに大いに疑いを深めただけで、とほほ、敢えなく敗退となった。

今回は雪辱戦だ。左方カンテぇ～、待ってろよ。お前の居場所は、とっくのまっくに分かってんだからなぁ～ ～。南壁の基部に沿ってトラバース、顕著なガリーを横切り左方カンテ下部のブッシュでひと休み。さぁーて、去年はここから迷っちまったんだよね。辺りを見回しても取り付きらしき雰囲気は皆無である。やれやれ、去年の二の舞は勘弁してくれよな。 ・・・が、今日は山の神様は味方だった。オシッコをしにブッシュを登った安斎が取り付き発見！やったぜ。この山行はもったぁ～。

稲子岳南壁全景

スルメの頭を目指して

１ピッチ目、２５㍍。スルメの頭みたいな変てこな岩を見上げながら凹角を攀る。傾斜はないがクラックを上手く使わないと攀りにくい。２ピッチ目、２５㍍。大きな硬い凹角の登り。３ピッチ目、３０㍍。顕著なチムニー。上部でハングに抑えられて左に移る。脆いホー

ルドの処理が核心。４ピッチ目、３５ﾒｰﾄﾙ。浮石が乗った緩いリッジ２５ﾒｰﾄﾙから硬い凹角。高度感満点の垂壁を越して終了。眼下に広がるミドリ池とシラビソの森が素晴らしい。５月の風を全身に受けホントに楽しい登りだ。垂壁はよく探せばがっちりしたホールドがある。

チムニーの登り

最終ピッチの垂壁を攀る安斎

終了点は砂礫の広大な緩斜面で稲子の天辺まで一投足であった。７月上旬には一面コマクサの群落となって足の踏み場もなくなるそうだ。我々はコマクサの根を傷めないよう、なるべく砂礫を崩さずに注意して登った。足元遥かにはミドリ池の水面が煌き、春まだ浅い針葉樹の森が絶海の孤島を洗う大海のように南壁の裾野をおおっていた。